滋賀県文化審議会次世代育成部会第13回会議　議事概要

1.　日　時　　平成31年2月13日（水）9時30分～11時30分

2.　場　所　　滋賀県庁本館4A会議室

3.　出席者　　委　員：岡田委員（部会長）、磯﨑委員、大橋委員、中尾委員、山田委員（5名出席）
事務局：村田管理監、田原課長、野瀬参事、西川主幹ほか

4.　議　題

（1）滋賀県文化審議会次世代育成部会長の選任について
（2）若手芸術家等の育成・支援について
（3）アートマネジメント人材育成の取組について
①県立芸術劇場びわ湖ホールの取組について
②県立文化産業交流会館の取組について
③アートマネジメント人材養成講座における講師の感想・意見等

5.　議事録　　以下のとおり

■管理監挨拶

■議題

	議題（1）滋賀県文化審議会次世代育成部会長の選任について ■岡田委員が互選により選出された。 議題（2）若手芸術家等の育成・支援について
部会長	このアートは幅広くアートなのか、それとも特定のジャンルに限定されているものか。
事務局	幅広くアートである。 議題（3）アートマネジメント人材育成の取組について
滋賀県立大学	今回は文化産業交流会館から県立大学と合同で、一緒に人材養成のプログラムをやれないかという話があった。地域に出て行って地域の方と一緒に何かを体験しながら学ぶという地域デザインDでやりましょうということになった。対象は学部の2年生か3年生で、基礎的な科目。チラシにはアートマネジメント人材養成講座とあるが、プロを育てるということよりも、文化ボランティアを育てるという意味合いが濃い。受講者の中にはアートマネジメントに近い立場で動いている方もいたの

	で、そういう方にとっては本当にアートマネージャーとしてさらに高めてもらうという一つのきっかけにはなったと思う。メインは一般の方が、関心があるからと参加された方が多い。 　参加者が非常に多様であり、専門的に働いている方もおり、サラリーマンで興味があったという方など、非常に幅広かったというのが今回の一つの特徴。全８回の授業で、私が心掛けていたことは、あくまでも受講者はお客さんではないということ。今回の講座の目的というのは、実践し自ら担い手になるということであり、受け身ではなく自らどんどん動いて下さいということを、その都度申し上げてきた。したがって、途中から受講生と呼ぶのではなくて、積極的に、多少とも責任を感じて動いてもらうため、受講生をスタッフという呼び方をさせてもらった。 　グループで物事を進める、学んでもらうため、統括・広報・会場という３つのグループに分け、それぞれ責任者を決めてやっていただいた。中には、ある都市の地域振興公社の文化センターの職員がいて、「アウトリーチはたくさん今まで経験しているが、企画からやったことがないので今回参加した」という方に統括の方のリーダーをしてもらい、良い経験になったと思う。 　一般参加者はグループのスタッフとして、後をついていくような感じの方も、グループの中で積極的に関わっている方もいらっしゃる。グループワークでやるということを今回の柱にもしていた。 　アートの力を「まちづくり」に活かすという、「まちづくり」という言葉が入っているので、閉じたアウトリーチではなく、アウトリーチ会場の周りにも何らかの影響を与える、あるいは、地域とのつながりをさらに強める場としてのアウトリーチにしようという視点を踏まえて企画運営をして下さいとお願いした。 　アウトリーチそのもののコンサートは盛況であった。事後のアンケートでは、受講生の大半の方が「大変良かった」、「良かった」という回答。回数やスケジュールについては、色々注文、ご意見をいただいているが、それを踏まえて、これからそれをどう改良しながらどうプログラムをより良くしていくかがこれからの改良点・課題である。
委員	ホールの職員や文化団体にとって土日は特に忙しい曜日であり、なかなかこういった講座を受けられるタイミングがない。平日の夜に講座を開催していただくとか、短期間集中講座といった方向性で今後取り組まれる可能性はあるのか。
文化産業交流会館	ホールの職員も対象にしているが、土日はホールの利用や事業が入っていたりするため、なかなか難しい。ホールの方にも一般の方にも来ていただきたい。県外の方も、県域色んな方にも来ていただきたいということもあり、参加しやすい時間帯となると必然的に土日の開催。実践型講座に切り替える前は一回完結の講座、座学をしていた。その時は色んな実演家の方に実際来ていただいてお話しいただくような回も設けたり、色んな趣向を凝らしてみたが、土日でも実際参加者に来ていただ

	くことは厳しい。ホールの職員向けの研修については、びわ湖ホールの説明されたようなスタッフセミナーを、休館日に開催している。意識的に棲み分けしているわけではないが、選んでいただけるといい。
滋賀県立大学	大学の立場からするとやっぱり夜は難しい。学生の授業であり、理想から言うと平日の時間が良いが、そうすると社会人の方が参加しにくい。合同講座であれば、夜は避け、平日は社会人の方がなかなか難しいため、土曜日と決まった。 ステップを踏んでいって最後アウトリーチを実際にやるというとことになるため、短期集中でやるというのは、今回のようにアウトリーチを企画・製作、運営する、実施するとなると、難しいと思う。 アウトリーチ開催まで講座を 6 回やったが、受講生のアンケートを見ていると、「もう 1 回ぐらいやらないと無理だ」と、特にチラシは「内部でもっと議論したかった」という意見もあった。 アーティストと意見交換、そして実際会場の施設のお気持ちを踏まえて企画運営するというのが特に大事。そのコミュニケーション、お互いの思い、あるいはスタッフとアーティストと受け入れ施設の三者が意見交換して、「こういうアウトリーチをやろう」ということを踏まえると回数がそれなりにあるか、熟成期間も設けないと、それなりの効果のあるアウトリーチはできないと思い、短期でやるような性格のものではないと考える。
委員	アーティストの動機、モチベーションは、自分が、色んなところで長けた人間になりたいという気持ちでやられていると思う。それをマネジメントするマネージャーは、どんなモチベーションを持つのか。一般的に世の中や社会で認められた普通のサラリーマンではなく、アーティストに近い何かがあるのではないかと思う。その辺を育成していけばもっと素晴らしいものになるのではないか。動機付けを考えられないものか。 アートマネジメント人材養成講座の参加人数が少なかったので、アートマネージャーそのものが、社会でどう認められているか気になった。アートマネージャーになれば非常に給料も高くなる、あるいは世の中から認められていくという状況を育成するのが、滋賀の文化・アートの役割にもなると思う。
委員	アートマネージャーという方で、滋賀県内において専門的にお給料をいただいて活動されている方はいらっしゃるのか。ホール職員という位置付けでしかいらっしゃらないのか、大学などで勉強していて、専門的な職種として今後成立する可能性があるのかどうかということ。 若い方が、アートマネジメントを学び、それを活かせる場がホールの職員になるしかしかないのか、ＮＰＯなどで中間支援団体として活動していくのか。個人でアートマネジメントをされている方というのは、全国的にいらっしゃるのか。

部会長	自分自身の老後の活動のため、活き活き暮らしたいからボランティアで参加したいというレベルの方から、ホール職員のように、そういうことに携わらなければならないような方々や、レベルがプロに近いような職業としてなさっている方とか、たくさん段階があると思う。職業的なレベルのことが、滋賀県に前例があるのかが分かりづらい。
文化産業交流会館	県内のＮＰＯで、音楽療法とか音楽を活用して活動しているＮＰＯ団体はいくつかある。
委員	アートマネージャーは職業的に仕事をされている方なので、もちろんホール職員の方々もアートマネージャーである。その他にも、例えば美術館に勤めている方々。美術館でも学芸員は芸術の専門家ですから、アートマネージャーとは言い難い。アートマネージャーはマネジメントの専門家であり、学芸ではなく、総務部門にいるような方がアートマネージャーだと思う。 滋賀県にはそれほど多くなく、京都や愛知県には複数ある実演団体・芸術団体、例えばオーケストラ。概ね公益法人になっているが、そういう所に勤めていらっしゃる職員の方々もアートマネージャーであり、ホールだけではなく、他にもいろいろな活躍の場がある。 アートマネージャーが活躍する場というのは、年々条件が悪くなっているというふうに聞いている。90 年代は夢があることをみなさん言っていたが、指定管理者制度の影響で雇用が短期化したり、なかなか若者が夢を持ってアートマネジメントの世界に入りづらい状況になっているというふうに側聞している。
委員	音楽のことで地域活性化と結びつけて、なおかつ人材育成という面で、実際に社会に対して活動してアウトプットを得て、成功体験がされている。これはアートでなくても他の分野でも同じことが学べる。特に学生等が、実際に社会の人たちと接触し、意見を交わして社会の人たちから「ああ良かった」と言っていただいたとは非常に重要。文化の分野でやっているけど、アートに関係なく福祉の分野でやっても良いと思う。
滋賀県立大学	学部生 3 人が参加したが、アートの世界に行くことはないだろうと思う。違う分野に行くと思うが、今回、授業に参加することによって色んなことを学べた。その経験が別にアートに限らずこれから色んな分野で生きてくると思う。そういう意味で幅広い人材育成になると思う。
委員	県内にも他に色んな大学、短期大学があり、音楽や美術を学んでいる学生達にももっと裾野を広げていけると良い。声掛けや人材集めは、どのようにプロジェクトをシェアしているのか。学生はこういうことがあるというのを知っているのか。

文化産業交流会館	合同講座のため、ぜひ他の学生も来ていただきたかった。社会人の方と同じように、大学あてにもこの募集のチラシをお配りしている。 チラシの内容が、ハードルが高く見えるかもしれない。アートマネジメントと書いているが、言葉の説明がないし、そもそも何をするかというのを分かっていただけないと来ていただけない。 大学やＮＰＯ団体など、参加していただけそうな団体にはご案内をお送りした。
委員	教授からの学生への一言っていうのはすごく大きい。教授がゼミの学生達に「一回行ってこいよ」、「見てきたら」、「こういう場でも勉強してきたら」という一声で学生は動く。教授の方からそういう声掛けであるとか、学生たちが活躍していく、未来を担っている学生たちにこういうことを勉強して欲しい、というようなことを働きかけていただくと、先生の一言は非常に学生を動かす大きな力になると思う。
部会長	文化振興基本方針は平成 32 年度までこれが有効で、このテーマでいくというということは、同じような内容のものを 31 年度、32 年度も行うのか。
事務局	個別の事業については、継続するもあるが、その時々に応じて見直しをして新しいものをやっていくというものも、ご意見を取り入れて変化していくこともある。
部会長	アートマネジメントというのは大変なテーマ。ジャンルもレベル幅広い。トップレベルの人材育成のことから、ボランティアで自分の楽しむためにちょっとやってみたいというレベルまで、それを網羅しようとすると幅広い色んなものを準備しないといけなくなる。その点で可能ではないだろうと思う。
事務局	アートマネジメントの人材を育成していくというのは非常に大事なことで、基本方針にも位置付けられており、ぜひ積極的にご意見をいただき、そのご意見を踏まえて事業を練っていきたい。
部会長	視察させてもらい、問題は複雑だと思った。アートとまちづくりも今はどんどんどん横断的に繋がっていっている状況。 まちづくりというレベルで機能するということを考えるのか、アートというレベルで本当に高いレベルに向かっていくというのか、という点でもだいぶ違いが出てくる。 まちづくりというレベルで考えるのであれば、まちづくりのどこにどう寄与したのかということを、テーマを明確にしてやっていかないと、なんとなく「文化で元気に」みたいなものでは、ぼんやりしていてよく意味が分からない。そこら辺が明確になってくると、参加者のモチベーションや、どういう人を求めているかということも、もっと明確になってくると思う。

部会長	芸術分野のことをよくパラレルに勉強されていないと、アートマネージャーにはなれない。文化の定義の中に様々なジャンルがあったが、一つのジャンルにしてしまうのはすごく難しく、それぞれのジャンルごとにかなり狙いを絞っていかないと、ぼんやりしたものになっていく。 アート、音楽などをどう使って滋賀県という地域に貢献させるのかという戦略をもっと緻密に練らないと、非常にぼんやりした印象がある。本来ならこんなプロラグラムが何十個も必要だと思う。色んな精度のあるレベルであれば、本格的にマネージャーを育成したいというモチベーションが県民に対しても伝わると思う。 今のレベルでは、本当にやる気があるの？と感じる。どこまで深く取り組んでいけるのかということについて、いろんな問題があると思う。
委員	アートマネージャーを育てたときに、まちなかに古民家等がたくさんあるが、そういうところを貸し切ると、アートの部分でも音楽でも両方いけると思う。音楽の部分だと、ミニコンサートをそういう会場で開く。アートであれば自分たち作品を持ち込んで見せるという手もあると。子ども達を呼び込んでワークショップを開くということも考えられる。 場所も大事だと思う。県内の北のほうで（アートマネジメント人材養成講座を）結構開催されている。南の方もこういうことに興味を持たれていても「北の方だと行きにくい」と思われると、難しい問題だと思う。 びわ湖ホールもあり、休館している近代美術館、その代わりのところ等、南のほうでもそういう会議を持っていただくとか、まちなかで利用させてもらえるような施設等も開拓していくと、少しずつ進んでいくと思う。
部会長	地域、ジャンル、モチベーション、レベル、様々にあるので、きちんとやると何十講座いるんでしょうかと思う。いきなりはできないと思う。 本来、アートマネージャーというともっとハイレベルな部分をイメージする言葉。言葉からいくと、もっともっと色々やらなければいけない。 文化産業交流会館と県立大学で何が出来るかというレベルから考えますと、今やっておられることは大変よく頑張ってらっしゃる。しかし、現実から発想するのか、テーマから発想するのかでだいぶ違う。テーマからいくとまだまだ不足部分が多いという話になる。
委員	こういう風に人材育成をして下さったら、育った方が学校への出前授業等も可能。近代美術館でも学校の方との出前事業をして下さっているが、そういうことを企画していただきたい。学校は今音楽分野であっても図工美術分野であっても子ども達を本物に触れさせるということを非常に教育のなかで重視しているので、こういう方々に活躍していただけると、子ども達にも良い刺激を与えていただけると思う。その繋がりができてほしい。

委員	クラシック音楽のジャンルに、特に次世代育成部門というのは偏りがあるという印象を受ける。クラシック以外でされているのであれば、どれぐらいの予算の比率で、このジャンルにはこれぐらいの予算をかけて育成していますということが明確には見えない。5年という第2次基本方針のなかで、3年間やってこられたなかで、アウトリーチやアートマネジメントで講座受けられた方がどれぐらい滋賀県内でアウトリーチ活動されてきたかのか、それがどれだけ地域に貢献できたかが、今現時点でもって滋賀県内でどれだけの活動をされている方がいらっしゃるのかも不明確すぎて、滋賀県にこれが足りないとか、こういった事業をやった方が良いという意見も言いづらい状況。 5年間でどういう着地点を目指しているのか、この会議が次の3次に向けての会議であればすごく有意義なものになる。 その地域それぞれの特徴があり特性があるので、そういったところを今の2年間でまとめていただくようなことがあるのであれば、より効果的な次の5年間になるのではないか。
委員	いろいろなアートフォームというかジャンルがあって、それぞれ重要であり、それぞれの方がそれぞれに思い入れがあると思うのですが、行政としては時間的にも予算的にすべてを網羅することは不可能だと思うので、やはり重点領域、優先順位というものを現実的には設けないといけないと思う。 もちろん、県全体で決めてもいいし、あるいは地域別に、この地域は演劇を重点領域にする、あるいはこの地域は音楽を重点領域とするというように地域別で分けて良いと思う。外から見るとやはりびわ湖ホールもあり、滋賀県の文化政策というと、やはりクラシック音楽が中心となっているのではないかという印象を持っていた。その印象は間違っているのか。あるいはすでにその優先順位、重点領域があるのであればそれを教えていただきたい。
部会長	私も常にそういうことを思っている。芸術分野幅は広いし、まちづくりとリンクしている。大きなジャンルの中で全部やることは本当に難しいと思う。 戦略がいると思う。その戦略の結果、滋賀県はここに重点を置くとか、これとこれをやるとか、地域ではこれをやるとか、そういうことの議論が必要。そういう議論をされた、コンセプトを練った部分での企画書のようなものがあればぜひ見せていただきたいが、それがこれからであれば、これからぜひその戦略を立てていかなければならない。 現状を批判するのではなく、発展するためにはその戦略が必要、取捨選択するためには、重点領域等の考え方が当然必要になってくるだろう。そういう全体像が見えると納得出来るし、目的とジャンルというものが、納得いく形で整理される。 滋賀県はやはりクラシック音楽なのか。

事務局	クラシック音楽を重点的にやっていくというものではない。滋賀には豊かな良いものがたくさんあり、文化の定義が基本方針第三章に書かれている。街並み、歴史ある建物、風景、そういうものも生活や暮らしにある文化、そして祭り、寺社仏閣。滋賀県に良いものがいっぱいあり、もっと大事に育てて、発信していこうというふうにやっているが、何を重点的にやっていくのか、何を選ぶのかというのが難しい。 行政というのは、公平性や、色んな人のことを考えて、たくさんの人に知って欲しい、届けたいという風に思いがち。そう思うがあまり、焦点がぼやけてしまう。 そこを皆さまのご意見をいただきながら一緒に考えていきたい。広くやるということも大事で、もう一方では、裾野を広げたり発信したりするという取り組みと、何かにその特徴を見いだして特化してやっていくということと双方やっていくことが必要。
部会長	アートマネジメントのアートいうのは広い意味での、今文化振興というところでのエリアを、狭めていないということで、割と広く捉えているということか。
事務局	広く捉えている。
部会長	文化とアートということを割と意図的に同義に捉えようとしているということか。
事務局	元々滋賀県は文化の方針であるとか、条例でも、文化という概念を広く捉えている。最近、国の方では生活文化というものも入ってきているが、それ以前から滋賀県では、暮らしの文化、生活の文化、自然も含めてそれが文化だ、というふうに言っているので、広く捉えている。
部会長	生活や文化や景観まで含めて文化として捉えてそれに誇りを持とうというという方針があり、そのなかの芸術的なものもその中の一つであると言うことか。 ここでのアートというのはかなり広い意味で滋賀県としては捉えたいと言うことで、滋賀県の戦略としてそのなかで、何をチョイスしてどう育成していくのかというところの狙いを精査していく必要ではないかと思う。それは来年度の事業にはなかなか活かせない。
事務局	来年度にたちまち反映できるものとできないことがあると思うが、次に繋がっていくので、しっかり受け止めて反映していきたい。 音楽、演劇、美術、クラフト、そういったものと繋がっていけるような場に、アートマネジメント講座で学んだ人たちが関わって下さると、学んだことをまた活かせるではないかと思う。

委員	アカデミックな領域で言われていることをひとつ申し上げる。アートという言葉の他にもうひとつ対比する言葉があり、英語でいうとアートとエンターテイメントという言葉がある。この二つの違いは区別するのは難しく、グレイゾーンがある。 どう違うかというと、エンターテイメントは、市場メカニズムで成り立つことができる。日本は資本主義国なので当然である。 ところが、市場メカニズムで成立しないもの、市場が失敗するものもある。教育や福祉分野は市場の失敗が見られる。アートも市場原理では十分に供給されないという見解が一般的であり、行政が関わるのはアートであって、市場メカニズムで供給が十分にされるエンターテイメントではないと思う。 また、アートとエンターテイメントでは求められるものが違うと言われている。エンターテイメントとは娯楽、楽しみ、癒やし、快楽というものを求めるし、求められる。それに対して、アートは深い思考などが求められると言われている。 ターゲットも異なる。エンターテイメントはターゲットが広く、誰でも楽しめる。ところが、アートはターゲットが狭いと言われている。アートはアーティストの熟練の技のような部分があり、それに対して享受者・鑑賞者の側も一定のリテラシーがないと理解出来ない、楽しめない。そういうアートとエンターテイメントという二つの言葉があって、大雑把にいって、今申し上げた違いがある。 市民対象のアートマネジメント講座というのは現実的でない。市民対象の講座は市民のアートのリテラシーを育むようなプログラムをやる方が、より効果的。 アートマネジメントという言葉を使う場合は、職業的な、専門的なものに特化していただき、市民対象はやっぱりリテラシーを育むのが目的ではないかと思う。 アートとエンターテイメントという二つのキーワードがあって、アートに関することがたぶん文化政策であって、エンターテイメントはおそらく産業政策の方だと思う。
部会長	アートマネジメントという立場に入る人の、自分の生きがい以外に、どう役に立とう、機能しようとしているのか、まちの何を変えようとしているのか、地域の何をどう作りたいのか、アートをどう拡張したいのか、とかいうことが求められてくる。 そうすると、まちのことやアートのことをよく知っていないと出来ない。マネージャーとしてもモチベーションというレベルでも、その辺のことをきちんと学んでいくということが必要。 協力するアーティストの利益というのも問題。「何でも良いから手伝って」では、非常に徒労感がある。アーティストも食べてかないといけない。お手伝いというのも、何年かに一回ぐらいなら良いが、いつもお付き合い出来るわけではない。金銭的な利益があるならいいのが、こういうことの場合、あまり考えられない。何が利益なのかということを考えてあげないと、協力する側もすぐ疲弊してしまう。 利益というのは、まちの中でどう役に立ったのかということがはっきりしている

	ということ。芸術分野の新しい取り組みとしてそれは評価される、評価軸が出てくる。 　芸術は今、拡散しているので、まちづくりにどう貢献したかということが明確であると、芸術としても新しい取り組みとして評価されるという一つのものさしができる。 　評価というものを芸術よりに考えるのか、まちづくりよりに考えるのか、どっちも可能であるが、どちらもアーティストの利益や評価に繋がるが、参加者に対してただ、「お疲れさん」ではなく、どう有意義だったのかということが明確に分かるような参加依頼をしていかないと、こういう協力というのは、アーティストはなかなか出来ないというのが正直なところだと思う。 　ちゃんとした仕事でやるとすると、何十万円かお仕事でお給料をいただかないととても出来ない。でもそれは期待できないことが多いだろうから、何で協力してほしいのかというところの問題意識を明確にしていただかないと、アーティストにとっても不利益になると思う。